



品質工学における技術の在り方 (7)

State of Technology on Robust Quality Engineering (7)

矢野 宏*

Hiroshi Yano

前回の検討でも述べた2013年第21回研究発表大会で著者が関わった研究のつながりから生まれるものは何かを明らかにするために、関係者に論文を送付して意見を求めた結果を紹介する。

7. エコシステム関係者の意見収集

7.1 エコシステムを作成するために

前回の最後に、なぜエコシステムを考えるかを検討するために、筆者が行った研究のつながりを紹介し、さらにそれに対する感想を求めることを述べた。何か新しいものを生み出すのではないかという漠然とした期待があった。必ずしも明確なイメージがあったわけではない。そこでまず関係者の意見を紹介するところから始める。

7.2 関係者の意見の紹介

意見を求めるためのFAXを送付したのは2013年8月13日であり、その後の返信を日付順で紹介する。なお、文中で筆者の名前を引用した場合は、すべて「著者」とした。入手時期の順序で並べた。

(1) アサヒ技研井上克彦 (2013.8.14)¹⁾

品質工学会の中で新しい動きを見いだすことの必要性から始まり、現状の停滞状況からの脱却方法を考えたとき、分野ごとにエコシステムを構築する試みを展開していくという流れが理解できた。それを前提に感想を述べると、著者が述べている危機感であったり、品質工学の広がりへの停滞をSN比的な見方で評論したらどうなるか知りたいと思った。つまり著者が関わってきた研究(例えば文末にある参考文献)に対して、著者が望むところの成果(成長)

との関係をSN比的に見るということである。そうすれば著者の言わんとする問題点がより明確に伝わるように思えた。例えば信号から見ると、立派な研究(技術)でもそれを外部に伝えたくないという意志が働いた場合はSN比は低くなるのか、逆に研究内容が劣る場合も低くなるのか…、または信号以上に大きい誤差因子は何か…、というようなことになるのか?

(2) 島根大学上原一剛 (2013.8.17)²⁾

品質工学の裾野を広げるために、さまざまな分野への水平展開は不可欠であると思う。品質工学は機能性の評価技術の体系であるので、あらゆる分野に展開できる可能性を有していることは周知の事実である。著者がこの論文で指摘しているように、広島の研究會をハブとしてこのような活動が展開されてエコシステムが構築されつつあることを、当事者として改めて実感している。一方で最近ではIT技術の発展によってFacebookやGoogle+といったソーシャルネットワークでの交流が盛んに行われているので、そういったネットワークを上手に活用すれば、品質工学のつながりが加速的に拡大されると思う。

(3) エスケー石畷秋元美由紀 (2013.8.19)³⁾

私が品質工学の存在と品質工学会の存在を知った時期はおそらく會員の大会発表数の減少が見られたときに重なると思われる。よって、研究発表の件数や會員数が急速に伸びていた時期を知らない世代に該当する。このため危機的な状況であることを見聞きしても正直なところ実感が無い。そして、品質工学を始めて2年程度である。こういった私の状況を前置きして感想を述べる。

品質工学の存在を知る以前から、製造業で開発部門の業務に携わってきて、いくつかの製品を市場に送り出した。送り出す時にはいつでもクレームで返

*応用計測研究所(株)